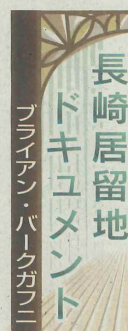


bunka@nagasaki-np.co.jp

# 休養のはずが最期の地に



26

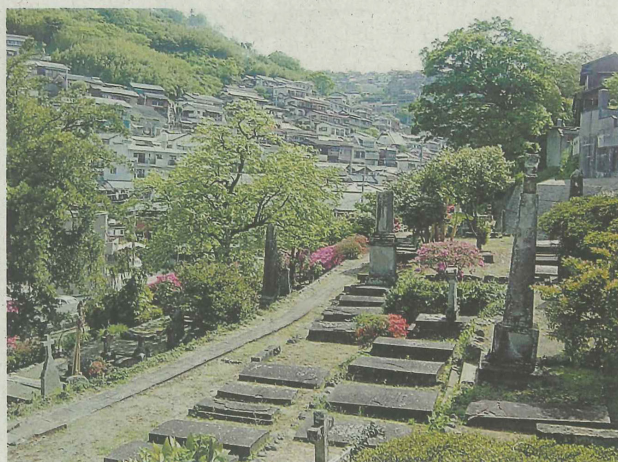
## コレラにかかった旅行者

ウィリアム・ビッカムの友人宅に身を寄せた。それは、イギリスの工業都市マンチェスターで生まれ、若い時に絹織物を扱う上海のジョンソン商会に雇われて中国へ渡った。上海では絹織物検査官を務め、イギリスへの輸出生系を購入するために頻繁に内陸部へ足を運んだ。家族宛てに送った数通の手紙と、彼が執筆した旅行記は、東アジアでの活動について興味深い一端を垣間見せてくれる。

文久2(1862)年9月、赤痢の後遺症に苦しんでいたビッカムは休養のために長崎に渡り、東山手文久2(1862)年9月、赤痢の後遺症に苦しんでいたビッカムは休養のために長崎に渡り、東山手

## 求められていた衛生改善策

長崎川上町の大浦国際墓地(筆者撮影)



におけるコレラの発生は、居留地のせいにされることが多いが、実際には入港した外国船が感染源だった。オランダ人医師も、グラバーやリンガーなど長崎居留地に住む外国人も、一貫して長崎の衛生改善策を訴えていた。

赤痢ですでに衰弱していたビッカムはコレラにかかり、長崎到着からわずか6日後の10月3日に急死した。享年28。遺体は大浦国際墓地に埋葬され、有志により大きな墓碑が建立された。明治16(1883)年に長崎を訪れた親戚がその墓碑を発見し、イギリスにいる母親へ手紙とスケッチを送った。その中で次のように述べている。

「長崎の外国人墓地ほど美しい安らぎの場は見ただけではありません。階段状のテラスに造られており、すてきな花や低木、張り出した木々がたくさんあり、きちんと整頓された状態に保たれています。太陽はきらきらと輝いていて、鳥はさえずり、明るい色のチョウが四方八方に舞っています。もしあなたがいたら、愛する息子の永眠の地がこんなに丁寧に入られ、そしてこのような美しい場所にあることに感謝していると思います」

長崎の人々や情景を詳細に描写している。既婚女性が歯を黒く染める習慣を好ましく思わなかったが、若い女性はいくらか「イギリス人女性と同じくらい白い」と記した。また、来崎してから港で海水浴を楽しんだことや下痢の症状がすっかり治ったことを喜ぶとして母親に伝えている。数日後にさらに恐ろしい病

に感染したと想像もしていなかった。

日本では初めてコレラが発生したのは、世界的大流行が日本に及んだ文政5(1822)年のことだ。幕末にはコレラが再び長崎港に停泊中の外国船から各地に広がり、ビッカムが来崎した文久2(1862)年には、残留していたコレラ菌により大流行が起こった。日本



在りし日のウィリアム・ビッカム(シエームス・ビュナン氏提供)



大浦国際墓地にたつむビッカムの墓碑、60年余の星霜を経て現存している(筆者撮影)

ウィリアム・ビッカムの墓碑は、今もなお川上町の大浦国際墓地の上段に静かにたたずんでいる。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します